

令和元年度 弘前大学学生海外PBL事業概要

部局名 教養教育開発実践センター

区分	内容
事業名	ハワイ島と弘前—未来に向けて互いに構築する地域社会の将来像 -Facing Future," Small Towns Learning from Each Other and Building a Better Tomorrow-
指導教員	① チームリーダー(教養教育開発実践センター)バーマン・シャーリー (准教授) ② 指導教員 (教養教育開発実践センター)多田 恵実 (講師) ※ ①はチームリーダー
学生の所属	人文社会科学部 文化創成課程 多文化共生コース2年1名・1年1名、農学生命科学部 分子生命科学科 応用生命コース 3年1名・農学生命科学部 分子生命科学科1年1名、医学部医学科2名、計6名
渡航先(渡航期間)	米国ハワイ州コナ(令和2年2月7日～令和2年2月16日)
実施スケジュール	令和元年10月1日～令和2年2月4日(教養教育グローバル科目後期授業) 令和2年2月7日 渡航 青森—成田—ハワイ州コナ 2月7日 コナ着、ブルーゾーン・プロジェクト見学、各ホームステイ・ファミリーへ 2月10日 NELHA(Natural Energy Laboratory Hawaii Authority)ハワイ州立自然エネルギー研究所訪問、コナ市庁舎にて学生研究発表会 2月11日地域社会の健康と医療: コナ・コミュニティ・ホスピタル、アライ・クリニック訪問 2月12日 持続可能な社会:ハワイの介護保険、マウナケア山の市民運動、ケン・ラブ 2月13日 ハワイ・コミュニティ・カレッジ・パラマヌイ校訪問: 授業参加、学生研究発表 2月14日 海洋実習 2月15-16日 帰国 コナ—成田—青森
事業の概要 ※本事業の目的に照らして、設定した課題を明確にしつつ、事業の成果がはっきりとわかるように記載してください。	<p>1. 目的: 本事業の目的は学生の「未来に向けて」の視点と洞察力を涵養することにある。世界を良くするために自ら何ができるかを各自の専門を通して見極め、各学生はそれぞれの研究分野で事前調査を行い、渡航前に学内で発表を、更にそれを現地にて地域住民を対象に発表することで意見交換を行い、弘前市周辺地域とハワイ島、地域の互いの成長と発展に寄与することを目的とする。</p> <p>2. 事業概要: 後期1学期間の教養教育グローバル科目における学習期間を通じて学生は、弘前地域とハワイ島の地域社会を独自の視点で学習・事前調査を行ったうえで渡航し、弘前とハワイ島両者でそれらの情報を基に提案できる計画をまとめる。渡航前に英語で、また現地で英語で、帰国後は日英両言語で、報告発表会を開催し地域社会に向けての直接の提案を行ってその成果を分かち合う。</p> <p>3. 設定した課題: このプロジェクトは学生が自らの専門分野、地域医療、持続可能なエネルギー、農業の食糧自給問題、地域文化、地方からの頭脳流出問題等について自ら学び、地域の課題をより広い国際的な視野で見る視点と意欲を育てるものである。渡航前には4人の外部からの専門家にも講義をしてもらい、それぞれの課題について調査考察を深め研究発表をハワイと日本でそれぞれ行う。</p> <p>4. 期待される成果等: 授業は1学期間を通して英語で行われ、各学生が行うフィールド調査に加え、渡航する現地とオンラインで直接対話をし、講義により受動的に学ぶだけでなく複数のイベントを自ら責任を担って開催し、主体的に体験から学ぶことができる。現地ではホームス</p>

ティ先やプロフェッショナル・プログラムとで人々との交流から直接受ける刺激はさらに多角的理解を促し、地域の健康課題解決と経済への貢献に役立つ端緒を探る機会となる。

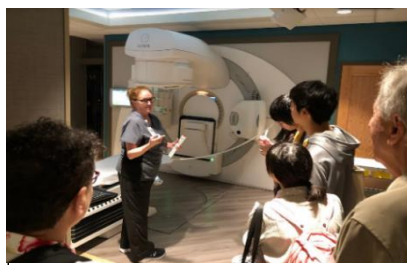
事業実施の様子
※ 事業実施の様子がわかる写真を貼り付けてください。
(最大6枚まで)



ビーチパークにてウェルカム・パーティ



コナ庁舎にて学生プレゼンテーション



コナ・コミュニティ・ホスピタルにて



ハワイ・コミュニティ・カレッジ授業参加



ホストファミリーとトウビシャバットのお祝い



NELHA自然エネルギー研究所

今後の展望

この事業において学生は留学前に教養教育の半年間の英語によるコンテンツ授業に加え、先進科学技術、ウェルネス運動、健康マネジメント、医療、栄養学、農業政策、地方文化の存続などの分野での学習とフィールド調査を進めてきた。国内で行政、医療、観光、栄養学の各分野の専門家の講義を通じて、弘前市と地域について学び、海外に応用できる共通の可能性を探り、比較対照することにより自らの地域に問いかけるべきものを探ってきた。現地とオンラインで直接対話をし、受動的に学ぶだけでなく、発表会を自ら責任を担って開催する主体的体験から学び、渡航後は人々との交流から直接受ける刺激と教えにより、さらに多角的理解を促され、地域の各分野での課題解決と貢献に役立つ端緒を探る機会となったことと思う。学生の一人の言葉にあるように、「こういった文化の違いは母国を離れ海外へ行き、自国の文化と比較することで把握できるようになるもの」であり、「間違いなく自分の人生が大きく変わったと感じ」、若いうちにこのような体験をできるだけ多くのすぐれたポテンシャルを持つ学生に経験してほしい。2020年度には米国ニュージャージー州での新たなPBLを計画しており、「場」の理論を基にさらにこのようなイマージョンプログラムを推し進める。今後も国内外で活躍できる未来の人材を育てていくことができると願っている。